『回勅　ラウダート・シ
ともに暮らす家を大切に　　』を読む

＊「『ラウダート・シ』にみる教皇フランシスコの思想
ラインハルト・マルクス（ドイツ司教協議会会長）」の解説を手掛かりにして

現実は理念に勝る

現実に直ちに取り組むのが教皇の特徴である。抽象的でも規範的でもない、具体的で現実的な言葉で問題を直視する考察スタイルは、その表れである。

『ラウダート・シ』の第一章は環境危機を細かく扱っている。自然科学との対話に努め、専門意見を尊重した結果、『ラウダート・シ』は最先端の科学知識を反映する回勅となっている。環境問題について述べながら、同時に、世界規模で存在する不正義にも触れる。特に回勅が訴えているのは、環境問題がとりわけ貧しい人々に影響を及ぼすということだ。教皇は、貧しい人々の視点から現実を眺めている。環境への懸念は、社会的な問題意識から切り離してはならないのである。貧困問題と環境問題は、原因は異にしていても互いに関係し合っている（**139 項参照**）。

教皇の現実に即した展望は、「**世界中のあらゆるものはつながっている**」（**16 項**）と言う実感につながる。自然に対する影響は、他の生態系の環境システムに重大な結果を与えないはずはない。それゆえ教皇が、総合的(インテグラル)なエコロジー（生態系）（**124 項参照**）という基本概念について論じる。エコロジー問題への取り組みが、人類と世界、被造物、そして神についての理解に及ぼす。

以下、『ラウダート・シ』が描く総合的なアプローチが政治と経済にとって、個人のライフスタイルにとって、そして根本的には近現代の進歩観にとって、どのような意味がるのかを考察する。

注：エコロジー<ecology> ①［生］生態学。②［社］人間を生態系の一構成員として考える思想・学問。人間生態学。

環境危機の原因

「逸脱(いつだつ)した人間中心主義」（**119 項参照**）。

人間の誤りとは、人間が被造物の中心に立って他の被造物を駆逐(くちく)し、自然に君臨しようとするからだ。「地上で神のための管理人たれ」という務め（創1.28参照）は、根本的に変わってしまった。神のかたちとして創られ、知性と自由と誰も奪うことのできない権利を有している特別な地位は、本来、他の被造物に対する相応しい責任と切り離せない**（110項参照）**。

だから、自然を単に対象として扱わない（日本人の自然観を参照）。

つまり、自然を無限に開発、搾取できる対象として扱わない。

相対主義は、自然の価値ばかりか、人間の価値をも否定することになる。**（122-123項参照）。注：相対主義**とは、人間の認識・価値判断に絶対的なものはなく、異なる条件のもとで互いに相対的であるとする考え。

とにかく、**「大地に叫びと貧しい人の叫びの双方に耳を傾ける」（49項）**必要がある。

新しく普遍的な進歩とは

「生活の質」（the quality of life）を高めるのが真の進歩と言えよう。**（194項参照）**。

新しいライフスタイルとは（203-208項参照）。

エコロジカルな回心とは（216-221項参照）。

喜びと平和（222-227項参照）。

秘跡のしるしと休息を祝うこと（233-237項参照）。

三位一体と被造物における関係性（228-240項参照）。